

2023年3月

『2022年度 私の一冊』

芳名	著書名	著者	出版社	発行
講師 吉川五百枝 先生	『Poetry Dogs ポエトリー・ドッグス』	齊藤 倫	講談社	2022
	<p>以前、この作者の『ぼくがゆびをぱちんとならして、きみがおとなになるまへの詩集』というよくわからない題名の詩集を読みました。日常の描写の間に、「ぼく」が「きみ」に詩を紹介するという詩集(!)でしたが、今回の場所は、詩を出すバーで、バーテンダーは犬です。名前は、「多聞」ではありません。このバーにふらりと入った「ぼく」は、先ずエリオットの詩をお通しのように出されます。犬のバーテンダーと会話をしながら出てくるのは詩。この会話が、詩の解釈のようになっては居ますが構える必要の無いなめらかさ。付き合ってもおもしろそうだと思います。31 篇のバー通い。</p> <p>どのページを開いても詩にであえます。</p> <p>「多聞」は、どこかでバーテンダーをしていないかなあ。その人に合った詩を見つけてくれて……。バーで「多聞」にあいたいなあ。</p>			
【 YA 】	『熱い絹 上・下』	松本 清張	講談社	1985
	<p>1967 年に起きたタイシルク王と呼ばれたアメリカ人の失踪事件を背景に、日本、マレーシアと舞台を広げたセミフィクション。</p> <p>清張作品の多くは、戦争がもたらした悲劇、政界の腐敗、社会に蔓延する汚職等、社会的背景を取り込んだ重いものだ。</p> <p>『熱い絹』も沢山の人物、出来事、場所等多く出てくるが、色々複雑に絡んだ糸が段々と終末に向かって一本の糸になっていく過程は、とても興味深かった。</p>			
【 M子 】	駆ける1, 2 少年騎馬遊撃隊 朝陽門外の虹 —崇貞女学校の人びと— 深層意識への道 ゲーテンベルクの森 歎異抄をひらく	稲田幸久 山崎朋子 河合隼雄 高森顕徹	角川春樹事務所 岩波書店 岩波書店 1万年堂出版	2021 2003 2004 2008

<p>【 TK 】</p>	<p>『続 氷点』</p>	<p>三浦 綾子</p>	<p>角川書店</p>	<p>2012</p>
<p>氷点は有名な小説ですが、続きがあることを知りよんでみたくなりました。</p> <p>殺人犯の子供を養女にして妻を苦しめようとした夫。</p> <p>罪をおかした人を苦しめようとしたのです。その後本当の殺人犯の子供と実の産みの母親が登場して色々展開していくのです。</p> <p>罪をおかした人を見下して人を許さない。罪を自覚して苦しむ。どの登場人物も結局自分のそれぞれの罪を自覚して人を許す事を知るのです。</p> <p>陽子の実の産みの母親もその父親も罪を犯していました。殺人犯の罪よりもっとひどい罪が描かれていてびっくりして読むのも辛くなりました。人を許す事がテーマでした。</p> <p>人を憎み自分の自尊心も持てない人間の苦しみを描いています。それは普遍の現実ですがそれをどう生きるかが課題です。</p>				
<p>【 JM 】</p>	<p>『じゃむパンの日』</p>	<p>赤染 晶子</p>	<p>Palmbooks</p>	<p>2022</p>
<p>読んだきっかけは中国新聞に月 1 回掲載されている「小山田浩子の本棚掘り」という書評コラムに「今年1番笑った本かもしれない」と紹介されていたことである。これが読まずにいらりょうか。</p> <p>芥川賞受賞作家である赤染氏のエッセイ集で、「馴染みある土地やそこに暮らす人々の機微を語る視線はどきどきするほど鋭くて温かい」「すばすばした文章と柔らかな関西弁の会話とで語られていて、ものすごくおかしい」・・・まさにその通りです。</p> <p>読んでほわんとし、考えさせられ、じわっとする本です。一読あれ。</p>				
<p>【佐村蘭子】</p>	<p>『家族だから愛したんじゃなくて愛したのが家族だった』</p>	<p>岸田 奈美</p>	<p>小学館</p>	<p>2020</p>
<p>本好きな友達が勧めてくれた本。内容は、中学生の時に父親が亡くなり、高校生の時に母親が車いす生活に。そして、ダウン症の弟がいるという大変な状況の筆者だが、自分のことや家族のことを時折、ユーモアを交えながらたくさんのエピソードとして綴っている。書いている内容は軽く読めるが、実際にはそれはそれは苦労と苦悩の日々だったと思う。しかし、ダウン症の弟や下半身麻痺の母親の笑顔が見たくて毎日前向きに生活する。苦境をユーモアに変える筆者の強さ、人間性に感動した。父親の死に対し、「絶望はゆっくり長い時間をかけて向き合い忘れることでしかなかった。」の言葉。「悲観は気分、楽観</p>				
	<p>『傘のさし方がわからない』</p>	<p>岸田 奈美</p>	<p>小学館</p>	<p>2021</p>

	は意思」の言葉が心に残った。勧めてくれた、本好きの彼女の生き方そのものの本だった。			
【伊達悦子】	『ほの暗い 永久(とわ)から 出でて 生と死を巡る対話』	上橋 菜穂子 津田 篤太郎	文藝春秋	2017
【 T 】	未来の年表	河合 雅司	講談社現代新書	2017
	<p>今年の年頭記者会見で、「人口減少は待ったなしの課題である。」と総理大臣が会見をし、様々な対策を打ち出した。高齢化と人口減少は日本の大きな問題で、このままでは日本という国家が成り立たなくなる。</p> <p>この本では、今後約百年間の人口減少カレンダー(予想)を考え、次世代のために今取り組むことを「日本を救う10の処方箋」として示している。</p>			
【 YT 】	『竈(かまど)さらえ』	見延 典子	コスモの本	2014
	<p>竹原にゆかりのある頼山陽先生を江戸時代を背景にわかりやすく書かれています。儒学者である頼春水先生を父に持ち、厳格に育てられたがゆえ、脱藩することになったけれど、日本外史、沢山の漢詩を作られて、今日まで読み続けられていることはとても素晴らしいことであると思います。頼山陽先生を、もっと身近に感じて頂ければ幸いです。</p>			
【 N2 】	『夏目狂想』	窪 美澄	新潮社	2022
	<p>作品礼子のモデルは広島出身の長谷川泰子さんで明治時代の終わりに生まれた実在の人物です。ハイカラな大正時代を謳歌するような暮らしぶり、育ち方だったのですが、父親の死後に環境が一変し自立の途を求め女優になる事を決心して上京します。</p> <p>自分らしく生きるために女優の道を諦め、得意な書くことを始めるのですが、女性が文筆で身を立てる事が許されなかった時代でした。長谷川素子さんは女優時代に中原中也の才能を発見し共に暮らしますが、その中也を捨てて、小林秀雄と暮らし、別れ、青山二郎に援助され、坂本睦子と知り合い文章を書き始め、林芙美子に認められ、坂口安吾とは互いの作品で支え合いながら暮らし、別れと様々な経験をします。女性が自分の思うままに生きるのが難しい時代の文学者達との関係や、心のままの情熱的な行動には驚きも覚えますが、関東大震災、二・二六事件、原爆、終戦後の昭和と激しい時代の波をくぐり</p>			

	<p>抜け、静かに亡くなりました。彼女の生涯には他人を傷つけながらも自分の思いのままに生きた、潔さと凜とした清々しさを感じました。</p>			
【 Y 】	優しい大人	桐野 夏生	中公公論新社	2010
	<p>福祉システムが破綻した日本の、スラム化した渋谷の地下で暮らすストリートチルドレンが主人公。ストリートチルドレンを助ける会や、女性ホームレス集団等が存在するのだが、優しい大人はどこにいるのか。複数の家族や他人が共同生活する中で、だれも親と名乗らず育つと子供はどうなるのか。人を信じられない主人公。</p> <p>人生をずっと地下で生きるなど、胸がふさがれる思いだが、その背景に子供を守り、愛する優しい大人がいないことがある。</p> <p>子供を保護しているだけでは足りないのか、やはり、幼い時の優しさや愛が、全うな成長を遂げるためには必要なのか。</p> <p>近い未来、社会で子育てをとった時、保護するだけではなく、愛情を受けながら育てられる必要があると再確認させられる。</p>			
【 K子 】	『あちらにいる鬼』	井上 荒野	朝日文庫	2021
	<p><u>あらすじ</u> とにかくすごい。3人+1人の心理合戦とでも言うか？</p> <p>登場人物 白木篤郎(作家)モデルは井上光春 白木笙子(夫の作品の清書をしている。短編を夫の名で活字にしている妻) 長内みはる(作家)モデルは瀬戸内寂聴 井上荒野(本名)白木の長女 この本の作者</p> <p>白木・笙子・みはるの三角関係は(この時作者は5才)血の雨の降ることなく時は流れます。感情の整理の仕方はピカイチ。3人があちら(死霊)になって成長した娘はこの三角関係を父の血を受け継いだ文才を発揮してこの本を書きあげます。本の帯に瀬戸内寂聴さんは「作者の父井上光春と私の不倫が始まった時作者は五歳だった」と書いています。</p> <p>これも又すごい！</p> <p>井上荒野さんの筆の力でモデルの顔が浮かぶので、フィクションとは理解しているのだが、あまりにも現実味を帯びてしまう。三人三様の「煩惱」の行方？を知りたいと思いました。</p>			

<p>【 SM 】</p>	<p>『むこう岸』 『母の待つ里』</p>	<p>安田 夏菜 浅野 次郎</p>	<p>講談社 新潮社</p>	<p>2018 2022</p>
<p>『むこう岸』 和真は有名進学校で落ちこぼれ、中三で公立中学に転校した。小五のときに父を亡くした樹希は、母と妹と三人、生活保護を受けて暮らしている。「カフェ・居場所」で顔を合わせながら、互いが互いの環境を理解できないものとして疎ましく思うふたりだったが、「貧しさゆえに機会を奪われる」ことの不条理に今できることを模索していく。立ちほだかるのは「貧困」という壁。中学生にも為す術はあった。和馬の知識と思考であり、樹希の行動力。次第に二人は互いにむこう岸を渡り始める。ブレディーみかこの「エンパシー」を思い出す。帯にある通り「子どもの貧困」を物語の力で伝える一冊であった。</p> <p>『母の待つ里』 —JMさん推薦— 物語は〈母〉のもとに足を運ぶ還暦世代の男女3人「おひとりさま」の視点で進んでいく。そして帰る場所を持たない彼らが見つめる「ふる里」とは慈愛に満ちた理想のふる里か。人生の次への道標かもしれない。</p>				
<p>【望月悦子】</p>	<p>『高瀬庄左衛門御留書』</p>	<p>砂原 浩太郎</p>	<p>講談社</p>	<p>2021</p>
<p>昔の武士道の生き方、人間としての価値観など考えさせられた読みやすい本でした。</p>				
<p>【 MM 】</p>	<p>『家族』</p>	<p>村井理子</p>	<p>亜紀書房</p>	<p>2022</p>
<p>村井理子 1970年生まれ 翻訳家・エッセイスト この本は村井理子の家族の記録である。 著者以外の家族(父・母・兄)は亡くなって今はいない。 心臓に病を抱え病弱だった著者、著者を溺愛する父、様々な騒動を起こし常に問題を抱えていた兄、父の怒りから兄をかばい続ける母…。 かつての家族が仲良く集まることはなかった。 壊れて消えてしまった家族をもう一度取り戻すべく著者が振り返る。</p>				